

社会科における児童の社会認識 ＜予備調査に表われた児童の事実認識＞

白 戸 順一郎
(弘大附属小学校)

1. はじめに

小学校の社会科授業の実施にあたって、その教材研究が必要であると同時に、授業を受ける子どもの理解の研究が必要である。

授業は、教材研究だけできまるものでもないし、また子どもの理解のみを検討してもきまらない。教育の目標と教材と子どもの理解との結合によつて授業のあり方はきまるのである。

授業をめぐる調査では、授業前の調査(予備調査・事前調査)と授業後の調査(事後調査)に分けられる。(授業の進行過程での調査もある。) 授業前の調査は、授業構成のための足場をかためるという立場と、授業の成果がいかなるものであつたかをみるために、子どもの考えを主として捉えることであり、また授業前にみられた子どもの考えと授業後にみられた子どもの考えとを比較し、授業によつて子どもがどのように変容したかを検討するのに役立てようとするものである。

2. 予備調査(授業前の調査)

予備調査は、授業の観察、分析の補助的な手法である。その内容や方法は、具体的なそれぞれの研究問題によつて違つてくると考えられるが、学習に関する既有知識や過去経験や認識の実態などにとどめ、あまり手広く行なわないで授業分析の視点にかゝるものに限定したい。

経験を認識にまで高めるには、既有知識をおさえておく必要があるし、授業の中で思考の発展過程を究明するには、事前の思考構造をとらえておく必要がある。

事前調査の方法としては、質問紙法、作文法、面接法などがあげられる。これらの方法は、調べようとする内容によつて当然規定されてくる。

予備調査において、子どもの考えを調査するには、あらかじめ授業の内容になる素材を決定する必要がある。子どもの理解についての調査では、質問紙法によつて子どもの知識をとらえ、それを数量的に処理することが多くの場合行なわれてきたが、これでは必ずしも授業の流れを構成する足場になりがたいものがある。というのは、断片的な知識をどう組み合わせても、子どもの考えそのものにはならないからである。従つて授業前の調査では、知識の有無を知ることとは勿論であるが、むしろ子どもの考え方を明らかにすることが大切である。

子どもたちの考え方は、教材に応じてそれぞれ変わるもので、いつも同じ子どもが同じ考えをもっているとは考えられない。子どもの家庭環境や地域の実態によつても大きく変わるし、授業によつても変わるものである。従つて、クラスの子どもたちの考えが、どのように違つて

みえるか、ということが調査の焦点になるであろう。しかも、クラスの子どもたちの考えが—色にみえるのでは不十分である。少くとも2種類以上にみえることが大切である。

子どもの考えを2種類以上に捉えるためには、考えの微妙なニュアンスの相違に着目し、その考えを吟味する必要がある。その吟味にあたって子どもたちの素材に対応する対応の仕方を問題にしたい。その対応の仕方は、その素材ならびに事態に対して、表面的な見方をしているか、また構造的な見方をしているか、という観点は一つの基礎になるものであると考えられる。

子どもたちの考え方、見方を、クラスの中で分けてみるができるならば、それらの考えと考えとの関係はどうなっているであろうか。低い考えと高い考えとの関係はどうなっているであろうか。低い考えと高い考えとは、質的にどのように内容が異なっているかについての吟味も、それなりに可能になる。

このようにそれぞれの考え方がることが明確になれば、それらの中の低い考えをどう高度なものにするか、また高い考えをさらに高めるにはどう指導したらよいかを吟味することができる。すなわち、このことは、子どもたちにどう学習させるかを吟味していることである。また授業の流れを決める根拠になるものを追求していることである。

なお、子どもたちの学習前の考えが明らかになっていることは、その子どもたちの考えの上に何を十にすることが大切なのかも考えられる。こうしてくると、初めに予想した教材も、授業の中では具体的にどのあつかうことが大切であるかもわかってくるのである。

3. 児童の意識調査—実践例Ⅰ—

(1)調査問題

「弘前市でこのごろ交通事故が多くあります。どうしてでしょう。そのわけについてあなたの思うものをいくつでも書きなさい。」

(2)調査の目的

弘前市における交通事故の原因について、子どもはどの位の数をあげ得るものか。また事故の原因を個人的な不注意の事実、事故と間接的に結びつく施設や道路、更に社会生活上の問題として捉える段階が考えられるが、本学級児童が学習以前においてどこまで捉えることができるかをみようとするものである。

(3)調査対象と方法

○本校児童 4年2組 40名

○方 法 自由記入方式

(4)調査結果

(オ一表) 交通事故の原因の捉え方

— 難易段階を 1. 2. 3. 4. とし類型番号を付した —

類型	1. 歩行者の立場	2. 運転者の立場	3. 施設・道路の立場	4. 政治（教育）の立場	5. その他	計
例	信号を見ないで通る	スピード違反	歩道橋がない	遊び場がない	交通機関の発達	
応答数	道路へのとび出し	酔っぱらい運転	信号機がない 道幅がせまい	都市計画の不徹底		
	170	288	55	5	16	534
%	31.83%	53.9%	10.29%	0.93%	3.02%	100%

(オ二表) 交通事故の原因の捉え方

→ 個人毎にみたもの()の中の数字は児童番号 ←

応答数 類型番号	1 ~ 9	10 ~ 19	20 ~ 29	30 以上	計(人数)
2	(1)(14)(17)(35)	(9)			5名
1 2	(3)(11)(13)(18)(22)(25) (27)(36)(37)	(2)(16)(19)(26) (31)	(15)(24)(28)		17名
2 3	(8)				1名
1 2 3	(4)(23)(30)	(10)(32)(38)	(5)(6)(7)(39) (40)	(34)	12名
1 2 4	(29)				1名
1 2 3 4		(12)(20)	(21)(33)		4名
計	18名	11名	10名	1名	40名

(5) 考 察

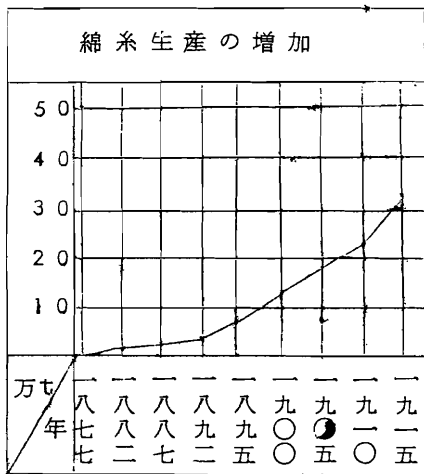
(イ) 応答数の中で一番多いのが運転車の立場で次が歩行者の立場である。この2つを合わせると86%である。施設道路の立場からあげた数は10%よりない。また個人毎にあげた数を見ると、9以内が学級の半分、19までと29までがそれぞれ四分の一ずつといえる。最低が一つ最高が45である。10以上あげられればいい方といえる。

(ロ) 類型 1. 2. の二つの立場から捉える子が半数に近い。三つ四つの立場から捉えている場合は関係的に多面的にもものを見る子であると言える。また応答数が10をこえた者についてみ

ると、一つの立場の子は1人、二つの立場から捉えた子は8人、三つの立場から捉えた子は13人、四つの立場から捉えた子は4人である。このことから多面的にみれる子は、応答数も多いと言える。しかし⑨の子のように一つの面から数多くあげられる場合は、事象に対する子どもの興味、経験が深いといえる。類型3の立場をあげ得た者は17人で応答数55、類型4は5人で応答数5で間接的な原因把握のむづかしさと同時にこのような思考ができる初期の段階といえる。

4. 児童の意識調査—実践例Ⅱ—

(1) 調査問題



「左のグラフは、日本の綿糸生産の増加を示したものです。明治10年(1877)から明治20年(1887)までは生産がすくなくなつたのですが、それ以後は急にふえていますね。どうしてこのように急にふえたのでしょうか。その原因(理由)だと考えられることを全部書きなさい。」

(2) 調査の目的

明治時代の工業の発達、日本の工業の基礎を築いたが、この時代にせいの工業を中心として著しい発展をとげたのはなぜなのか。その原因について子どもは学習以前に、どれくらいのところまで

捉えることができるものか。綿糸生産の急速な上昇を示すグラフを見せて考えさせる。

歴史的要素も加わるので、明確に捉えられるかどうか問題であるが、子どもの考えやすい表面的な原因から順に7つの視点(類型)を設けておき、どこまで突込めるかを見ようとするものである。

(3) 調査対象と方法

○本校児童 5年2組 39名

○方 法 自由記入方式

(4) 調査結果

(オ一表)

明治時代における綿糸生産増加の原因の捉え方

— 難易段階を1~9とし類型番号を付した。 —

類型	1.機械技術の導入機械の発明	2.工場数職工数の増加	3.原料が得やすい	4.市場(国内貿易・戦争)	5.低賃金(重労働)	6.国の政策	7.その他	計
例 応 答 数	<ul style="list-style-type: none"> 外国から機械や技術を取り入れた 日本でも機械明した人があつた 	<ul style="list-style-type: none"> 綿糸工場が多くなった 糸をつくるために工場で働く人がふえた 	<ul style="list-style-type: none"> 国内で綿花生産 綿花の輸入 材料の輸入 	<ul style="list-style-type: none"> 人口も増加して糸をつかう人がふえた 鎖国をやめたので外国との貿易がはじまり輸出としてつた 	<ul style="list-style-type: none"> もうけたい人が出てきて工場をつくつた 女工をからで夜まわりに働かせた 	<ul style="list-style-type: none"> 鎖国による近代工業のおくれもど? そうと 富田に工場をつつたそこをあつめた 	<ul style="list-style-type: none"> 交通機関の発達 外国人の出入りにいちばんかんたんにつくれるところ 	
	18	18	13	58	4	8	11	130
%	13.85%	13.85%	10.00%	44.62%	3.08%	6.15%	8.45%	100%

(才二表)

明治時代における綿糸生産増加の原因の捉え方—個人毎にみたもの

— ○印の中は児童番号 —

類型番号	1 ~ 2	3 ~ 4	5 ~ 6	7 ~ 8	9 以上	計
1.	(3)					1
1. 4			(5)			1
4	(11)(36)(37)(39)	(13)(16)(22)(29)(32)				9
1. 2. 4		(2)(14)(35)				3
1. 2. 3. 4		(9)	(11)(21)			3
1. 3. 4		(25)	(31)			2
2. 4	(12)	(19)(30)				3
3. 4	(8)					1
2. 4. 6		(40)				1
4. 5. 6		(6)	(20)			2
4. 6	(18)	(7)				2

1. 2.	7		(28)				1
1. 3.	7		(13)				1
3.	7		(23)				1
2. 4.	7		(38)	(24)			2
4. 5.	7		(33)				1
1. 2. 3. 4.	7					(26)	1
4.	7	(10)	(4)				2
	7	(27)					1
計		10	21	6	0	1	38名

(5) 考 察

(1) 応答数の中で一番多いのが4の市場で、次が1の機械導入と発明と工場職工数の増加である。これらを合わせると72%以上になる。また個人ごとにあげた数を見ると全体で130で、これには意味はつきりしなくて除いた分は入っていない。

明治になつて鎖国が解かれたことにより、外国と自由に貿易できるようになつたことが、綿糸生産増加の最も大きな原因と考えている子が多いことになる。

しかし、交通事故の身近な問題と違つて、歴史的な要素が加わつているので、ずいぶん抵抗があつたようだ。

(2) 類型からいうと、4だけの立場から捉える子がいちばん多く9人、他は特にまとまつていないでばらばらである。子どもたちは、はつきりした既習経験がないので、それぞれのいろいろな過去の経験を考え直し組み立ててまとめようと努力した。5の低賃金、6の国の政策まで考えることができた子は6人もいるが、これらの子どもは、興味と関心がかかなり深いといえる。

5. まとめ

これらの予備調査をしたあとの分析については、あまりくわしく書けなかつたが、調査はあくまで授業の観察分析の補助的手段であるから、これを授業にどう生かすかが問題なのである。

それぞれの子どもは、問題に対して、漠然とこうなのではないかということを書いているにすぎない。それが事実であるかどうかは何も確かめられていないのである。また、それらのことは、どう関係し合つているのかもわからないのである。

この調査結果を、教師はよく吟味し分析して、個々の子どもの考えについても理解し、授業によつて話し合いをさせ、断片を組織づけ、検証し、より高度な社会認識にまで高めていかなければならない。

<参考文献>

1. 全国教育研究所連盟編

社会科と社会認識の形成

・その指導 I

2. 弘前大学教育学部附属小学校

研究紀要 1969.